

1996年 上海日本語教育事情

上海外国語大学教授 王 宏

..... 1996年12月7日上海外国語大学主催の“上海市日本語人材需給の現状と見通しについてのシンポジウム”が開かれた。このシンポジウムには、中国側からは、上海市人民政府、外国企業のための求人会社、大学日本語科関係者が、日本側からは上海日本総領事をはじめ関係各団体など、計30余名が出席した。
この報告書は、シンポジウムの準備作業の一つとして1996年9月に行われた日本語教育調査とシンポジウムで討議された内容の一部をまとめたものである。.....

この報告書は、次の点において海外の日本語教育関係者も関心を寄せるのではないかと思われる。

1. 最近、中国日本語学習人口の増減がとやかく論議されているが、中国経済発展の“竜の頭”といわれている上海の日本語教育はどうなっているか。

2. 数年来、中国特に上海から来日する就学生の減少により、日本における日本語学校経営は苦境に立たされていると聞く。では、中国で日本語学校が最も集中している上海ではどうか。

3. ここ3、4年、国際交流基金主催の日本語能力試験は、来日就学生の減少に伴って、日本での受験者数も減少しているが、それに引き替え、海外での受験者数は増加している。それはなぜか。

今回の上海日本語教育事情調査は、1993年の全国調査をもとに、主に電話により在校生数を調べた。大学専攻日本語はその全数を調べたが、その他は一部抽出調査

し、1993年との増減率を見てみた。

1993年国際交流基金の調査では、中国の日本語学習人口は26.5万人である。そのうち上海市は23,770名で、全中国の9%を占め、都市別で1位になる。今回の調査から推定すると、1996年秋、上海市の日本語学習人口は1993年より約1割増である。そのうち、大学専攻日本語は4割半増、大学非専攻日本語は1割弱減、中等学校は倍増、成人日本語教育は横ばいである。

1. 大学専攻日本語

1990年上海市で専攻日本語（修士課程・本科・高等専門科を含む）を設けている大学は6校、在校生625名、1993年は9校949名で、1996年は13校1,380名に達し、96年は90年比121%増、93年比45.4%増となり、増加率は決して低くない。殊に、高等専門科は社会の当面の急にこたえるため激増している。

このように、大学専攻日本語は急増しているにもかかわらず、日本語能力を有する人材はなおも上海市のニーズを満たせずにいる。その主たる原因は1994年ごろからの日系企業の急増にある。現在、中国で日系企業が最も多い省・中央直轄市は上海であって、日本が上海の外国企業投資額の一位を占めており、日系企業は1920社、投資額45.5億米ドルに達する（出典：1996年9月末統計・上海市外事弁公室提供）。また1996年上海港と日本との輸出入貿易総額は上海税関の統計では142億米ドルで（出典：1997年2月1日上海『新聞報』）、上海に長期滞在する日本人は1万人を突破した（登録上は5,000余人）といわれている。

外国企業のための求人会社は、“英語科の卒業生はそ

上海市大学専攻日本語学生統計表

	1990年	1993年	1996年
上海外国語大学	223	356	400
復旦大学	76	89	87
華東師範大学	95	107	72
上海对外贸易学院	67	110	109
上海大学	101	106	173
同济大学		20	99
上海觀光高等専門学校	63	86	114
上海理工大学		50	76
上海水産大学		25	53
上海師範大学			102
上海鉄道大学			20
上海黄浦区业余大学			18
上海科学技術職員労働者大学			57
合計	625	949	1380



の全員の就職を斡旋することは出来ないが、日本語科卒業生はいくらでもほしい”と言っている。つまり、日本語科の方がずっと売手市場だということである。

日本語人材の素質については、調査から見ると、日本語の口頭表現能力、勤務態度、業務実践能力は高く評価されているが、待遇にこだわる、知識面が狭い、仕事の熱心さが足りないなど、指摘されるものもいる。

2. 大学非専攻日本語

1993年上海市27大学の非専攻日本語学生数は4,493名である。うち、第1外国語760名、第2外国語3,733名で(コラム1参照)、前者漸減、後者漸増の傾向にある。1996年14校の調査では、大学非専攻日本語学生数は1993年比7.1%減である。本科生としては普通の課目の一つ取るより外国語を一つ取った方が就職に有利なので、第2外国語としての日本語を選びたい。ところが、非専攻日本語の教師不足から、学校側では開講中止、受講者数制限などの措置をとっており、そのために学生数が減少しているのである。

3. 中等学校

1993年調査では、全国で日本語課目を開設している

中等学校は409校、学生11万人で、学生の91.9%は東北3省と内蒙古に集中している。中等学校の日本語学生数は年毎に減っているが、その主な原因は英語を学ばないと進学に不利だからということにある。

1993年の調査では、上海で日本語課目を開設している中等学校は8校、学生2,070名であったが、1996年調査では18校、学生4,337名となり、いずれも倍以上増えている。その原因は93年調査が不十分だったということもあるが、94年以降学校数・学生数が急増していることも事実である。

この18校のうち、2校が普通の中学・高校で、あとは、みな職業高校や中等専門学校であるが、今後、観光・経済貿易関係の中等専門学校や職業高校で日本語教育を発展させる余地は十分にあると思う。問題はやはり日本語教員不足にある。

4. 成人日本語教育

上海市の成人日本語教育は主として“业余研修学院”で行われるが、“业余”とは業務の余暇を利用したという意味である。1993年上海市业余研修日本語学習者は14,819名であったが、1996年14校の調査では学習者は93年比1%増である。

上海の业余日本語学習の経緯をたどると、1980年代後半から90年代のはじめにかけて、出国ブームのため学習者が急速に増え、1993年～94年ブームが冷めるにつれて下り坂となった。ところが、1995年からまた上海日系企業の急増によって学習者が増えはじめた。つまり、上海では1992年に出国ブームで业余日本語学習が最高潮に達し、1996年の学習者数はそれよりやや落ちるが、日本語学習熱は依然として高く、日本の日本語学校のような苦境は上海では全然見られない。

当면、上海での业余日本語学習の主な目的は上海の日

コラム1

中国の学校教育における日本語教育制度

中国の学制は小学校6年、中高校各3年、大学4年、修士・博士各3年である。このほか、職業高校と中等専門学校は中卒後3年と4年、高等専門学校は高卒後2～3年である。1970年代以降、中国の外国語教育は主に英語であって、日本語・ロシア語はその1%にも及ばない。英語教育は中学から始まるが、大都市では小学校4、5年からである。

いま小学校で日本語教育を実施しているのは大連市周辺だけである。中高校で、英語教育を行わずに日本語教育が実施されているのは、主に東北3省である。

大学・高等専門学校で日本語科(専攻日本語)が開設されているのは約100校。大学では大学生はみな非専攻

外国語を学ぶことになっているが、非専攻日本語が開設されているのはその約半数 500余校である。非専攻日本語には第1外国語と第2外国語とがある。第1外国語の日本語は本科1・2年の必修科目として240～280時間履修する。これはもともと中等学校で日本語を履修したもののために開設されるのであるが、一部大学・学科では初心者向けに仮名から教えているところもある。第2外国語の日本語は本科3、4年生の選択科目として120時間履修し、英語4級試験合格者が選択出来ることになっている。

日本語関係で修士課程がある大学は約20校、学生100余名で、博士課程は3校、学生僅少である。

コラム2

中国における日本語教師不足

1. 実情。下記統計表に見られるように、大学専攻日本語では、1990年に比べて93年は専任教師4.3%減に引き替え、学生は31.4%増で、教師不足は明白である。大学非専攻日本語教師増加率は学生より僅かに1%高いが、ここはもともと教師不足の甚だしいところである。中等学校では、教師18.9%減に対して学生9.3%減で、教師不足のため、日本語の授業を中止、または日本語クラス数を減らす学校もある。また、大学日本語教師担当コマ数はノルマ超過、クラス学生は定員超過、日本語教師はさらに副業として业余学校で授業担当。まさに負担過重である。その後遺症は大きい。

2. 出国・研修。規定によれば大学教師の資格は修士卒業以上であるが、実際には日本語修士卒業僅少のため、日本語本科生が卒業後すぐ教壇に立つ。ここ10年、これら若手教師は日本へ研修に行く機会に恵まれているが、研修期限を過ぎても帰国しない者が多い。中等学校教師は出国はおろか国内研修の機会さえ少ない。

したがって、昇進にも影響する。こういうわけで教師陣を離脱するものが続出している。

3. 待遇。現在中国の国家公務員・医者・教員の待遇は次第に改善されて来ているとはいえ、金融・貿易会社や外国企業との待遇上の格差はなお大きい。例えば、上海では大学新卒の月収は1000元（120米ドル）弱だが、日本語科新卒者が日系企業で働けば月収2000元以上になる。そのために、日本語教師志望者が少なく、たとえ日本語教師になっても、日系企業や金融貿易会社に転出したり、また出国研修してそのまま帰国しないのである。

中国日本語教師・学生数統計表

	専任教師			学生		
	1990年	1993年	±%	1990年	1993年	±%
大学専攻日本語	976	934	- 4.3	6,054	7,952	+ 31.4
大学非専攻日本語	1,219	1,357	+ 11.3	65,421	72,134	+ 10.3
中等学校	1,447	1,173	- 18.9	122,103	110,781	- 9.3
総計	4,010	4,105	+ 2.4	249,112	265,292	+ 6.5

系企業に就職することと、ある種の資格を取得するためであると言える。1で述べたように、日系企業の上海進出で大学日本語科の卒業生だけではニーズを満たせないで、业余日本語学習者も一役買って出るようになった。求人広告から見ると、日系企業は高等専門学校卒業以上の学歴と日本語能力試験2級以上の人材を要求しているようである。このため一部の业余研修学院ではこれに対応するコースを設けるようになり、また、日本語能力試験受験者も増えてきているのである。

上海外国語大学では1984年から、日本語独学検定試験を実施している。試験は毎年2回で、日本語6課目と国語・哲学・政治経済学3課目の試験に合格すれば高等専門学校の卒業証書が授与される。受験申込者は1990年代当初は毎回100余人であったが、1995年から急速に増え、1996年下半期は1,190名に達した。卒業生数は1990年から1996年まで累計281名である。独学検定試験のために設けられた学習班には、昼間班と夜間班がある。昼間班学生は2年間の学習後、高等専門学校の卒業証書を待たずに日系企業に就職する人が多いようである。これらの人は、上海周辺の工場現場通訳を担当するケースが多い。

日本国際交流基金主催の日本語能力試験は、中国では以前その参加者は一部の大学生に限定されていたが、数年前から社会人にも開放されるようになった。上海市では、就職上の必要から受験申込者は年毎に増え、1993年は800余人、1994年は2,000余人、1995年には2,500

余人、そして1996年には5,200余人に激増した。上海でのTOEFL受験者の激減とは裏腹である。

上海市では50才未満の幹部はコンピュータと外国語（英語か日本語）の試験にパスしなければならないことになっている。上海市の初級日本語年2回の試験参加者は、1995年705名、1996年1,115名である。

このほか、職級昇進を申請するにも、外国語の試験にパスすることが要件の一つになっている。そのために、日本語を勉強する人も少なくない。

上記日本語試験の盛況からも、上海成人日本語教育発展の一端を窺うことができよう。

現在、业余日本語学習班の90%以上は初級日本語である。教師レベルなどの関係で、多くの学校が中上級日本語課程を開設出来ずにいる。

以上述べた1996年上海日本語教育事情から見て、1998年予定のアンケート調査では、もし中国でのその調査が十分なものであれば、中国日本語学習人口は、1993年調査より多少増えるのではなからうか。

参考資料：王宏 1993年中国日本語教育事情調査報告
1990年との比較（日本語教育事情報告編『世界の日本語教育』1995〔第3号〕国際交流基金日本語国際センター編集発行）